

横芝光町民ギャラリー企画展

考古資料で見る
横芝光町の歴史展4
中・近世

横芝光町教育委員会

はじめに

町民ギャラリー企画展「考古資料で見る横芝光町の歴史展」は、今回で4回目になり、取り上げる対象を中・近世としました。中・近世と一言でくる時代は、鎌倉時代から江戸時代まで、それで見えてくるのは武士が政権を担っていた時代です。それは平安時代の古代律令制の崩壊と混乱の中から、新しい秩序と価値観、社会が誕生し、それを新しい主体者である武士が担った、あるいは武士が主導したという、歴史的にはその必然性があったのではないかと思われます。

それでは中・近世という時代、房総、さらに横芝光町はどのようにであったか、それを具体的に示すためこの展示を企画しました。中・近世では既に多くの文字資料が残され、その主体者名や事件等を知る事ができます。しかし、地方では細々とした事まで文字資料が残されてなく、また残された文字資料の記述が真実であったか疑わしい部分もあります。それを補助するものとして、近年、考古資料からの中・近世の歴史を明らかにしようという試みが進められています。

考古資料にはその当時、実生活に使われていたものが多数あります。つまりそうした考古資料を見る事によって、文字資料では記録されないその当時の生活の一端を知る事ができ、また、人々の経済活動や精神活動等も確認する事ができます。考古資料は文字資料に記された歴史実を、動かし得ない物証として示す事ができる重要なものもあります。その一方で物証の解釈の仕方によっても、歴史を左右する事にもなりかねない、両刃の剣であるとも言えます。そのため考古資料の取り扱いには、慎重さも必要とされるところです。

中世の房総は、桓武平氏の千葉氏が支配し、その庶流、家臣も含めて割拠し、多くの中世遺跡を残しました。また、中世後期になると幕府と鎌倉公方との対立に巻き込まれ、例外なく戦国時代の渦に呑み込まれて行き、多くの城が築かれました。横芝光町も平安時代中期、武士発祥の地のひとつとして数えられ、室町時代中期には千葉氏内乱の舞台ともなり、そうした関係からか多くの中世遺跡が残されています。その中世遺跡を取り上げ、また発掘によって出土した資料を示して、中世という時代の地域史を考えみたいと思います。

近世では、徳川幕府の強固な幕藩体制の成立により、特にその中心である江戸に近いという理由から、房総は幕府直轄領か譜代の封領になり、安定した経営が為されました。そのため豪農はないが、貧農も少ないという格差の少ない地域であったと思われます。特に横芝光町では、今もその名残を今日も留め、その文化が息づいている所もあります。しかし、そうした前時代の文化も、様々な変化の中で取り残され、あるいは見捨てられ、次第に消えて行こうとしています。ある面では仕方ない事ですが、先祖が残してきた文化の中に、これからの方に向かって多くの示唆を与えてくれるものもあります。その為にも残せるものは残し、たまには振り返って頂ければと思います。

目次

はじめに

目次

横芝光町の年表	1
I. 房総の中世	
1. 房総の中世草創期	2
2. 房総の鎌倉幕府創立期	2
3. 房総の中世中期（南北朝期）	3
4. 房総の中世後期（室町時代中期）	3
5. 戦国時代の房総	4
6. 中世の千葉氏	5
II. 房総及び横芝光町の中世考古資料	
1. 横芝光町出土の中世陶磁器	6
2. 中世陶磁器の产地	7
III. 中世の宗教	
1. 横芝光町の寺院	12
2. 横芝光町の中世石塔	14
3. 横芝光町の神社	15
IV. 横芝光町の中世遺跡・城郭	
1. 篠本城跡	17
2. 芝崎遺跡	26
3. 中島遺跡	30
4. 傍示戸遺跡・傍示戸城跡	33
5. 坂田城跡	34
6. 鍛冶屋台遺跡	36
V. 横芝光町の近世（江戸時代）遺跡	
1. 神山谷遺跡	37
2. 長倉経塚	37

おわりに

参考文献

例言

本書は、平成27年10月10日から同年12月23日まで、横芝光町立図書館2階町民ギャラリーで開催された「考古資料で見る横芝光町の歴史展4 中・近世」の図録である。

本図録の、執筆・編集は横芝光町教育委員会社会文化課生涯学習班道澤明が当たった。

時代・年代		世界・日本の主な出来事		平安時代		鎌倉時代		南北朝時代		室町時代		安土桃山		近世		
平安時代	9世紀	承和・天平の乱(平野門の乱)(949-950)	藤原文化	永和(981-985)	安和の変(藤原公家の乱)(985)	保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	後三年半役(1003-1005)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	元治(1575-1582)	元治の改幕	江戸
鎌倉時代	11世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
南北朝時代	12世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
室町時代	13世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
南北朝時代	14世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
室町時代	15世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
安土桃山	16世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
近世	17世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
近世	18世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
近世	19世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
近世	20世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権
近世	21世紀	源義家・源義兼の乱(945)		保元(1003-1004)	保元の乱	延喜(1003-1048)	延喜の改幕	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	治承(1181-1185)	治承・寿永の戦(1185)	承久(1191-1195)	承久の戻(1195)	承久(1221-1222)	承久の改幕	鎌倉政権

横芝光町の年表(中・近世)

1. 房総の中世

1. 房総の中世草創期（将門から常胤）

中世の主役は武士だと言われている。その武士の初元は、高望王が平氏姓を賜り、その子が平氏姓を名のって、両総に土着して行った桓武平氏に始まる。その中で歴史上大きな事件を起こし、後代まで名を残すことになったのが平将門である。将門は高望王の孫に当たり、下総国豊田郡、猿島郡、相馬郡などを領したといわれ、そこで近隣同族との領地争いから、乱へと発展したと言われている。その発端が女問題で、同族良兼との争いである。良兼は本町屋形に住したとの伝承があり、このとき将門はこちらに攻めてきたとも言われている。良兼の住んだと言う屋形には、昭和60年に調査された粉豆遺跡があり、平安中期の遺跡が確認され、良兼が住んでいた可能性が確かめられた。

将門の乱で将門は滅ぼされ、平氏はこれを収めた平貞盛、田原藤太（藤原秀郷）を主に、平良文の一族が勢力を広げた。その約100年後には良文の孫の忠常が乱を起こし、千葉の地は荒廃し、完全に古代律令制は崩壊していった。しかし、この時代の武士の動向については、ほとんど文献が残ってなく、大部分が伝承と推定から語られている謎の時代である。



平将門の乱・平忠常の乱の関係図

2. 房総の鎌倉幕府創立期

中世の始まりは、武士が政権を取った鎌倉時代からというのが一般的で、鎌倉時代を前期とする。源頼朝が挙兵し、安房へ逃れ、房総の有力者であった千葉常胤、上総広常等の協力を得て、再び相州鎌倉に入り、幕府を創立したのが治承四年（1180年）である（定説では頼朝が征夷大將軍に任命された1192年とされる）。この時、千田庄を平氏方の藤原親正は、常胤を襲おうとしたが、逆に捕らえられてしまった。これによって房総は、ほどんど頼朝方となった。上総広常は忠常から5代目、上総の国を領し上総介を称したが、寿永2年（1183年）、その力を恐れた頼朝の命で誅殺された。千葉常胤も忠常から5代目に当たり、千葉庄を領したことから千葉氏を名のった。常胤は幕府創立に貢献したことから、千葉氏宗家として下総の守護になり、その嫡男胤正をはじめ、相馬師常、武石胤盛、大須賀胤信、国分胤通、東胤頼の6人を千葉六党と呼び、一族の有力・守護とし、各地に配した。そのほか椎名胤光は、千葉庄椎名崎から匝瑳郡野手に移り、匝瑳椎名党としてこの地域に勢力を拡大した。広常死後、上総介は胤正の子常秀に継承されたが、上総国は和田義盛に給され、そこへの復帰は叶わなかった。その後、和田義盛は建保元年（1213年）蜂起するが、討たれて上総は北条氏頼となった。



鎌倉幕府創立期の情勢

3. 房総の中世中期(南北朝期)

元弘三(1333)年鎌倉幕府が滅んでから、明徳三(1392)南北朝が合体するまでの南北朝時代を中性中期とする。この時代、南朝と北朝の対立のみならず、足利尊氏と新田義貞との対立、また、尊氏と足利直義との対立(親応の擾乱)などに絡み、守護職の地位確認と千葉氏領有地のその占有争いが重なって、一族間での争いが激化したと思われる。中でも千葉氏直轄領である千田庄を巡る争いは、宗胤と胤宗との間で深くなつたと思われ、千田太郎か千葉介を名のるかで争われた。宗胤の子千田太郎胤貞は足利尊氏によく付き従った事から大隈守を拝命されるが、延元元(1336)年、下総への帰路病没した。すると南朝方だった胤貞は尊氏に降伏し寝返り、下総守護を安堵され千葉介になると、胤貞の子(一説では弟)胤康は北朝富房に近づき、千田庄で千葉介と戦うことになった。この千田庄並木城、次いで土橋城での攻防で、千田側は破れ千田庄の地盤を失い、九州小城へ逃れ九州千葉氏となつた。

親応二(1351)年、貞胤が亡くなると、子の氏胤が跡を継ぐが、この時、尊氏と直義との対立(親応の擾乱)がおき、これに氏胤が巻き込まれて行った。氏胤は両者の間で右往左往する中で、勢力を衰退させて行った。



4. 房総の中世後期（室町時代中期）

享徳三(1455)年、鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を暗殺したことにより端を発し、関東全体を巻き込んだ大乱となり、関東もこれより戦国時代となった。その前に関東では、上杉禅秀の乱や、鎌倉公方足利持氏が幕府と対立して起こした永享の乱、持氏の遺児を奉じた結城氏朝が挙兵した結城合戦などがあるが、既に不安定になっていた。結城合戦に関与したと言われる里見氏は南總で再起し、上総には足利成氏から所領を認められた武田信長が入り、千葉氏を含む様になった。そのような状況の中で起こった享徳の乱は、鎌倉公方と関東管領方との二手に分かれ、千葉では千葉本家の胤直、胤賢が管領方に、庶流の馬加康胤、武田信長、里見氏などが公方について争うことになった。そして馬加康胤は千葉本家を襲い、胤直、胤賢を千田庄に追い、胤直を志摩城から土橋城で討ち、胤賢を小堀城で討つ。これを聞いた美濃郡上にいた東常継は千葉に駆けつけ、実胤・自胤を支援し、馬加康胤を討つ。千葉本家滅亡後、康胤死に、千葉氏の当主となったのが康胤の子輔胤である。そして本拠を千葉から本佐奈城に移し、その家臣団や千葉の勢力が大きく変わった。町内千葉本城でも旧千葉宗家直臣であった藤本氏が没落、三谷氏も坂田城を追われることになる。



5. 戦国時代の房総

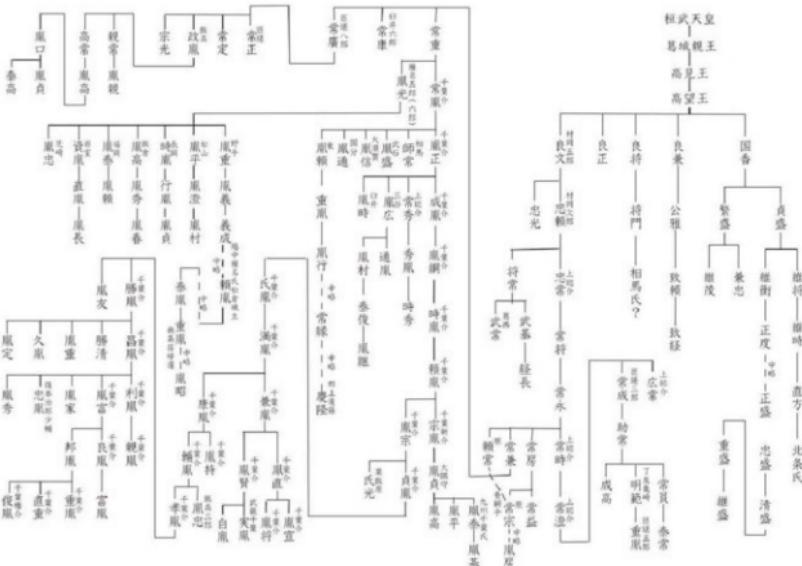
関東は享徳の乱以後、戦国に突入していった。千葉氏は宗家が康胤の流れに代り、本拠を本佐倉城に移った。また、安房には里見氏が入り、上総には長南を中心に武田氏が勢力を張り、西からは後北条氏という新興勢力が手を伸ばし、新たな緊張状態が生まれた。しかし、千葉氏は一族の内江と古河公方家の内江に巻き込まれて勢力が衰え、戦国大名への発展をなくして後北条氏の傘下に入り、これで一蓮托生となつた。そのような状況の中で、まず天文七(1538)年、小弓公方と古河公方との対立から、小弓公方足利義明と北条氏綱が市川国府台でぶつかった第一次国府台合戦が起きた。義明は古河公方二代政氏の子で、当初鎌倉八幡宮別当になつたが、関東管領との対立の中で還俗してその渦中にに入った。はじめ親の政氏と、次いで三代高基と対立、真里谷武田氏の後援で小弓に入り、小弓公方と称した。義明は支援する武田氏や里見氏は東京湾を挟んで北条氏と対立したことから、第一次国府台合戦が起き、これで義明は討死、同心した里見義充は安房へ帰陣した。次いで永禄六(1563)年、上杉謙信の要請を受けた里見義充がまた国府台へ出陣、それに対し北条氏康が対して、第二次国府台合戦が起きた。この二つの戦いによつて北条氏はより房総への関与を深め、千葉氏を自陣の傘下に加えることとなつた。そして天正十八(1590)年の豊臣秀吉の小田原攻めを迎えた。



6. 中世の千葉氏

前にも述べた様に、中世の萌芽は千葉で全国的に最も早い方で、それは桓武天皇曾孫高望王の上総国司着任が契機であった。高望王は国司退任後、平氏姓を賜り上総に土着(場所は不明)し、多くの子を生し、房総をはじめとする東関東各地に配して行った。これが桓武平氏の起りである。子の1人の良兼は本町屋形に居を構え、住んだだと言われ、その居館から屋形という地名が生まれたという。また、兄弟の良文からは忠常へと繋がり、これが千葉氏へと広がって行った。千葉氏はさらに上総・下総各地にその庶流が土着し、それぞれの土地名を取って名のる様になった。鎌倉幕府創立に貢献した常胤から分派した相馬・武石・国分・大須賀・東の千葉六党はじめ、その前には上総・匝瑳・稚名がおり、また原・臼井・鍋木・円城寺・三谷など、多くの庶流が出た。しかし、これらの庶家はそれぞれ独立性が強く、土地をめぐっての内紛や、時々の政治情勢によって対立したりで、結果的に千葉氏本家の力を衰退せしめ、戦国期には後北条氏に従属し、近世まで残ることはできなかった。それでもこれだけ多くの千葉氏の中でも、全国各地に所領を得て続いた庶家もあり、九州千葉氏の様に近世大名の家臣となって生き抜いた一族もいた。

横芝光町にゆかりのある氏族では、千葉庶流の椎名氏が鎌倉時代より旧匝瑳郡を中心に勢力を広げ、その支配を扶植して行った。また北部の日吉地区は、千葉氏によって香取社に寄進、香取郡千田庄とされ、その支配は千葉氏が直接当たった。そのため鎌本は南北朝期には、九州小城から来た加瀬氏が入ったと思われる。小堤・坂田城は千葉庶流の三谷氏が築城したとされるが、15世紀中頃の享徳の乱の時には、千葉賢胤が小堤城に逃げ込み討死したと言われる。坂田城はこの後井田氏に乗っ取られ、三谷氏は匝瑳の新村城に移る。井田氏は諸説あるが、16世紀はじめに千葉氏の家臣になっているが、一族ではないと思われる。



両総平氏・千葉氏系図

II. 房総及び横芝光町の中世考古資料

1. 横芝光町出土の中世陶磁器

考古学的に歴史を解明するのに、指標となるのが土器や石器である。土器や陶磁器は人間が生活する上で必需品であり、日本では縄文時代以降、常に生産され使われ、その形や文様が変化してきた。中世になると陶磁器となり、その種類が豊富になるだけでなく、産地も広範囲となり、より複雑な構成を有してくれる。それは社会の変化だけでなく、人々の経済活動がより活発になったことによる。

横芝光町ではこれまでに 10 箇所余の中世遺跡が発掘され、多くの遺物が出土したが、中でも歴史的指標となる陶磁器がその主体となった。中世になるとこの関東でも、陶磁器は中国からの貿易陶磁から、在地生産の土器まで幅が広くなり、時期的には 12 世紀の平安後期から、16 世紀の戦国時代 500 年間にわたる。それを産地と年代との時系列で示したのが、図・の中世陶磁器編年である。これでは平忠常の乱があった 11 世紀から示し、この時期と思われる景徳鎮白磁壺の破片と、瓦器碗の写しを入れた。これが律令制期最後の遺物で、これをもって房総における考古学的古代は終焉する。

12世紀では、終末鎌倉幕府創立期と思われる同安窯系青磁皿と、常滑山茶碗、縁の立ち上がりが小さいカワラケがあるが、歴史上の動きとは関わりなく、この時期の遺物は少ない。

13世紀になると、龍泉窯青磁蓮弁文碗が増え、これに景德鎮白磁口禿皿、古瀬戸では四耳壺、瓶子、常滑では捏鉢、壺、大甕、それに渥美の壺が加わるのが特徴で、全体的に急速に点数が増える。カワラケは立ち上がりが広がり、浅い。

14世紀になると龍泉窯青磁は無欵碗の質の落ちるものになり、これに定窯系白磁皿に入る。瀬戸では大皿、香炉、花瓶、茶壺など種類が増え、常滑では捏鉢と大甕に集約される。カワラケは縁の立ち上がり角度が60度ぐらいのものが多い。

15世紀では、龍泉窯青磁は棱花皿、白磁は定窯系と景德鎮の割り工台小皿、端反皿、八角杯、丸杯など、吉州窯では絵釉小皿、平碗、天目碗、卻皿、茶入などが加わり、ほとんどの器種が出揃う。常滑は14世紀と変わらず、瓦器、土器ではカワラケのほかに内耳土鍋、茶釜、香炉、擂鉢などが加わる。この15世紀が中世陶磁器の最も多い時期である。

16世紀になると青磁はなくなり、貿易陶磁は景德鎮染付皿・碗があるので、瀬戸では大窯丸碗・端反皿・擂鉢、常滑はなくなり、カワラケは朝顔状に広がる形になり、急激に遺物が少なくなる。



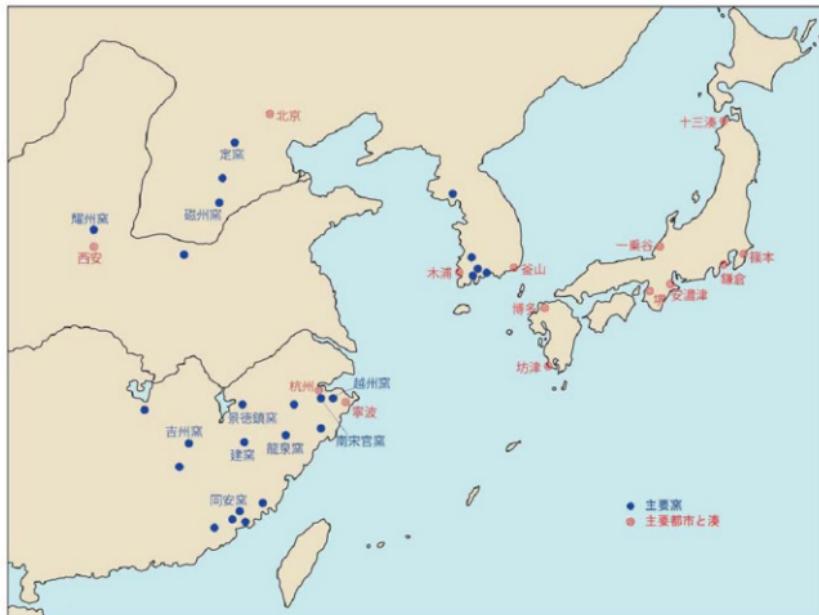
国内主要港・都市と陶磁器産地

このように出土陶磁器を見ると、時代が大きく変わる11・12世紀、16世紀で少なく、ピークは15世紀にある。これまでのところ町内では戦国期に当たる坂田城を調査していないので、16世紀の遺物が少ないのは仕方ないとしても、15世紀から16世紀の変化は極端である。その時期の歴史的変動（享徳の乱以降）とどうリンクするか、また、陶磁器産地の動向、経済活動などはどう影響したかをも考慮しなければならない。

2. 中世陶磁器の産地

中世になると房総で出土する陶磁器には、地元で作った土器だけでなく、古瀬戸や常滑などの国内の有数の陶器産地から、さらに中国の貿易陶磁まで、幅広い産地の陶磁器がある。それら中世陶磁器の産地について概括してみる。

地元生産の土器と言ったが、性格には土器と瓦器とに分けられる。土器には大きくカワラケと呼ばれる土器小皿と内耳土鍋、それに茶釜形土器、擂鉢がある。またカワラケには轆轤整形と手捏ね整形とがある。手捏ねカワラケは京都系で、房総ではほとんど出土しない。カワラケは宴會用の使い捨てを基本とし、主に公家・武士階級の特別消費財とされる。内耳土鍋は鉄鍋の代用品として15世紀に出現し、江戸時代になると熔炉へと変化する。形は浅鉢形と深鉢形の2系統があり、地域によって多寡がある。茶釜形土器も鉄製茶釜の代用である。これらの土器は在地生産とされるが、おそらく専門職人が各地を回って、各地の注文に応じて製造して行ったものと思われる。瓦器は窯で焼成（蒸焼）して焼き上げる焼き物で、古代須恵器焼成から派生したが、低火度で焼成するため軟質で黒色である。古代末では浜津楠葉が、中世になると奈良が主要な産地となるが、それを模して他でも生産したと思われる。



大陸の陶磁器産地と主要都市と湊

古瀬戸は、12世紀の尾張瀬戸で須恵器から発展して施釉陶器を生産したのを開始とし、15世紀までのあな窯という登り窯で焼成した時期を古瀬戸と言い、大きく3期に分けられる。15世紀末から16世紀には焼成室の幅が広くなる大窯生産が始まり、産地も多治見、土岐にも広がり、この時期を瀬戸・美濃大窯期と言う。古瀬戸では中国陶磁を模した梅瓶・四耳壺はじめ、小皿、水滴、擂鉢など、小形から中形品のあらゆる機種が作られ、主に東国へ出荷されていった。さらに15世紀には古瀬戸を模して遠州初山窯、駿河志土呂窯などが操業された。

常滑は、瀬戸と同じ須恵器からの発展であるが、こちらは無施釉の焼締陶で、土は粗く、大甕等の大振りなものを主として生産した。機種はそのほか壺、捏鉢がある。12世紀から16世紀初めまでを10期に分けられ、それぞれの機種で変化が捉えられている。常滑窯は知多半島に分布し、知多とも呼ばれる。これに対し渥美半島で生産されたものを渥美と呼ばれる。渥美は須恵器の伝統を残し、灰色で叩目のような押印がある。しかし、その一番の特徴は国宝秋草文壺に見る線刻画(文様)がある。

瀬戸をはじめとする中世の代表的な陶器生産地を中世六古窯といい、常滑、信楽、越前、丹波、備前が掲げられる。このほか前掲の渥美、珠洲、東播などが加わり、そのほとんどが常滑と同じ焼締陶である。



瀬戸四耳壺と白磁四耳壺
(東京国立博物館)



常滑初期(12世紀)
の大壺
(東京国立博物館)



渥美の壺
(東京国立博物館)



珠洲の壺
(東京国立博物館)

貿易陶磁ではほとんどが中国製で、その多くが青磁と呼ばれる焼物で、その産地は中世前期12世紀では、中国南部の同安窯を代表とする、色が少しくすんだ緑色で、文様に猫搔き文を描いた同安窯系青磁が年代指標としてある。13世紀になると、青磁は龍泉窯系のコバルト色の鮮やかで蓮弁文碗に入る。龍泉窯は中国中南部浙江省の山にある龍泉を中心として、300箇所1000基以上の窯があったと言われ、北宋の12世紀から明代の15世紀まで操業した巨大な産地であった。また、宋宫廷では青磁が好まれ、北宋では汝官窯、南宋では郊壇・修内司官窯で、官窯青磁の優品が焼かれた。龍泉では青磁と一緒に天目碗も焼かれている窯があるが、天目碗専門で焼成した建窯、吉州窯がある。そのほか白磁では定窯、黒釉刻搔文陶の磁州窯などがあるが、不明の窯も多くある。



越州窯青磁の水注
(ともに東京国立博物館)



景德鎮窯青白磁の梅瓶



北宋代青磁皿



青磁蓮弁文碗



元代青磁

この青磁はいずれも龍泉博物館



淡青色青磁



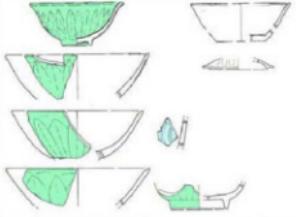
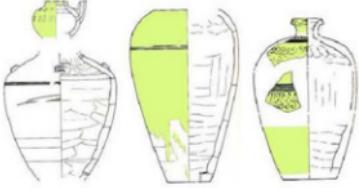
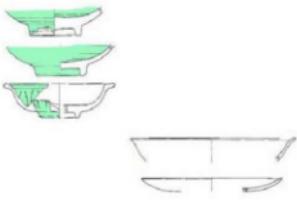
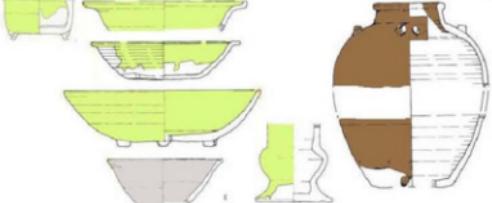
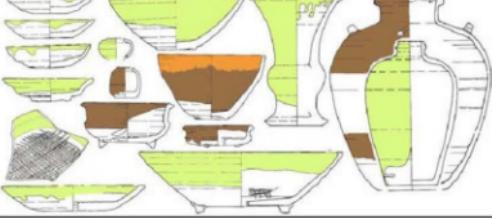
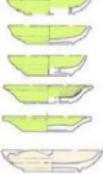
景德鎮湖田民窯染付皿（湖田民窯博物館）



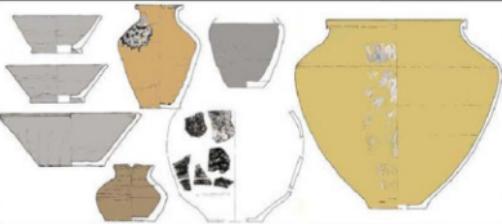
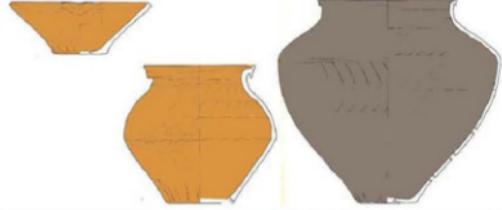
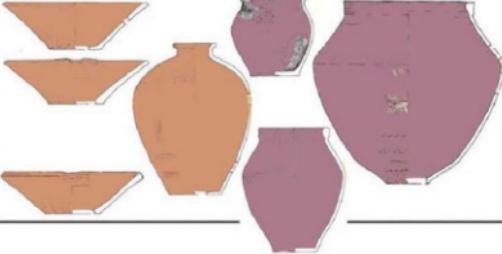
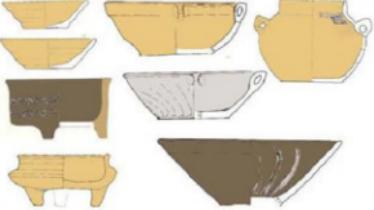
龍泉安仁口の青磁窯（南宋）



景德鎮湖田の染付民窯（明代）

	貿易陶磁	瀬戸
11世紀		
12世紀		
13世紀		
14世紀		
15世紀		
16世紀		

中世陶磁器編年

常滑・渥美	瓦器・土器
	
	
	
	
	
	

III. 中世の宗教

中世の宗教と言えば、鎌倉時代後期に興った浄土宗や日蓮宗などの新興仏教が、まず思い浮かべる。古代律令時代では朝廷と貴族、それに地方有力豪族の権力象徴としての仏教であった。それが中世になって武士に権力が移ると、武士が仏教の担い手となり、また平安後期に流行った浄土教は、分かりやすい教理から庶民にまで受け入れられ、仏教が庶民にまで広まった。神道では律令時代から続く神仏習合により、寺と神社が寄り添うようにあるか、寺の守護神としてあるもののが多かった。しかし、明治の神仏分離で、その名残はほとんど残っていない。ここでは今日残っている寺院と神社、宗教遺跡と遺物から、中世の宗教を考えることにする。

1. 横芝光町の寺院

横芝光町には、各集落に1～3の寺院がある。古代から寺院があったこと考えられ、また、平将門の乱の時、京から不動明王が運ばれてきたときも、町内寺院に一時置かれたと言われている。今日ある寺院がすべて中世からあったとは言い切れないが、多くはその立地から中世に創建されたものと思われる。また、寺院の本尊の中には、明らかに中世前期に造立されたと考えられる仏像が5件あり、その中には、胎内名に「平常秀」と書かれた薬師如来がある。平常秀は常胤の孫で上総介になった一族である。このほか平安後期の定朝仏である阿弥陀如来、鎌倉時代に流行った善光寺信仰から造られた善光寺式阿弥陀三尊など、この時期の仏像が5件もあり、いずれも先述薬師如来のように武士階級が檀那となって造立したものであろう。



薬王院と木造薬師如来立像



横芝光町には中世以来演じられていると言われる民俗芸能「鬼来迎」が伝わっている。「鬼来迎」は虫生地区広济寺に伝わる仏教劇で、その起源は鎌倉時代と伝承され、その内容は、地獄に墮ちた死者が、觀音菩薩の救済によって極楽往生するという、当時、淨土教の様に新興仏教が庶民にも広がる中で、庶民に仏教信仰への喩伝を分かりやすく表現したものと思われる。県内でも他に成田市や香取市にもあったが、現在は本町広濟寺だけとなり、全国的にも稀な民俗芸能であるどころから、昭和51年に重要無形民俗文化財に指定され、毎年8月16日に広濟寺境内で、地元虫生地区的保存会によって演じられている。この「鬼来迎」では現在は演じなくなってしまった広濟寺縁起譚三段があるが、これの舞台となった鬼堂が、今も広濟寺から東へ500m行った所にあり、周辺地形と地名をあわせてみると、中世淨土式伽藍が構成されていた



鬼来迎大序の場面



鬼堂遺跡遠景

事が考えられ、鬼堂遺跡として残されている。

平成4年にはこの鬼堂遺跡の確認調査が実施され、下の写真の様に石塔、古瀬戸片等が出土し、中世以降がある事が証明された。

また現在も、鬼堂跡には元禄紀年銘の無縫塔と石造地蔵があり、かつてここに寺院があった事を示している。



平成4年の鬼堂遺跡
発掘調査

2. 横芝光町の中世石塔

中世鎌倉時代は浄土教をはじめ新興仏教が勃興した時代で、より庶民に広がった時代でもあった。そのため各地に寺院が造られ、様々な仏教遺物が残された。

中世の宗教的な遺物としては、板碑をはじめとした石塔がある。中でも板碑は今も多くが町内に立っているものが多く、その数は30基ほど確認でき、中世の名残を示す資料として重要である。板碑の多くは黒雲母片岩製の下統型で、23基あり、次いで飯岡石製の自然石板碑が5基ある。板碑の源流である武藏型は2基のみが確認されている。彫刻は阿弥陀主尊が多く、変わったものでは五輪塔がある。このほか篠本城跡からは、発掘で10基ほどの小型の板碑が出土した。

五輪塔や宝篋印塔は部材ごとにばらばらであることが多く、かなり多く分布している。下の二又長福寺山門内には、五輪塔と宝篋印塔が無造作に積み重ねられ、その正確な基數は分からなくなっている。



小川台隆台寺前の板碑



二又長福寺山門中の五輪塔・宝篋印塔



3. 横芝光町の神社

横芝光町には、現在およそ50の神社が数えられ、ひとつの集落にほぼひとつはあると言っていいだろう。その規模は神職がいる宮内熊野神社から、小祠に近い本殿のみの神社まで様々であるが、多くは未だに信仰されきれいに手入れされている。神社の系統別では熊野神社系が最も多く、この地域が海に近く、また紀州からの移民が多くかった事、平安時代に於ける熊野信仰の流行が伝わった事等が掲げられる。その例として右の写真の上は屋形四社神社で、主祭神は速須佐之男命とされる。この神社の地は、平安時代、平良兼の居館のあった所と言われ、その伝承から星形という地名が付いたと言われている。下の写真は宮内熊野神社で、平安時代の南条庄は熊野神社領であったと言われるほど、かつては大きな勢力を有した。熊野神社系はこのほかに5社ほどある。そのほか、八幡、稻荷、大国、日枝等が続き、小規模になると子安、水神等が加わる。変わった神社では、於幾に栗島宮があり、神社については、地域的な特色はないと言つていい。



屋形四社神社



宮内熊野神社



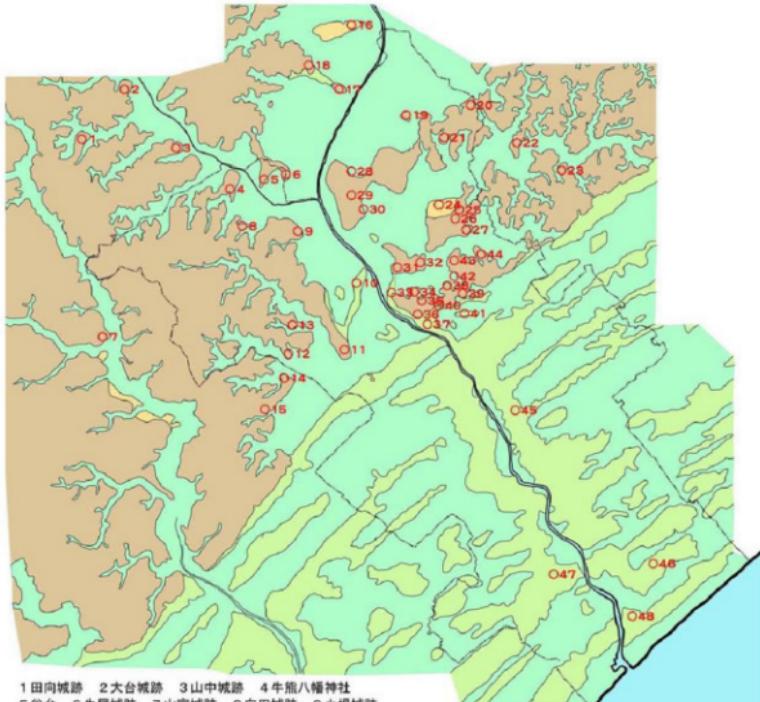
横芝光町の神社分布

IV. 横芝光町の中世遺跡・城跡

横芝光町はその歴史でも述べてきた様に、様々な歴史事件の舞台となり、また土地の豊かさから様々な抗争の地となってきた。そのため他の地域から比べると、中世遺跡の密度が高く、また、中世城郭の数も多いと思われる。特に栗山川左岸の旧光地区では、台地のほとんどに中世城郭が存在すると言って良いくらいで、これまでの埋蔵文化財調査では、ほとんどの遺跡から中世の遺構が検出されている。その代表例は町北部に位置する様本城跡で、調査前は土塁も堀も見当たらず、たいした城跡ではないと思われた。しかし、発掘をするにつれ、埋められた堀が何条も検出、建物跡をはじめとする遺構が多数検出し、陶磁器や種々の遺物も数多く出土し、これまでに前例のない中世遺跡として注目された。また台地上だけでなく、芝崎中島遺跡では低地の居館跡が検出され、多様な中世遺跡のあり方が認識できる様になった。

しかし、この地域の中世に関わる文献は少なく、この地域の中世についての解明はほとんど進んでいない。そこで考古学的な資料を頼りに、この地域の中世の歴史を少しでも明らかにしたい。

この地域の中世遺跡の多くは、未調査のものが多く、また、ほとんど史跡として整備されていない。特に坂田城跡は戦国時代の城跡として、県内でもその保存状態が良好で、その姿をよく留めている遺跡でありながら、未だに史跡指定されておらず、その解明も全くと行っていいほど進んでいない。このような貴重な遺跡を後世に残すよう、多くの住民に理解を得る為にも、今回の展示をできるだけ分かりやすい様にした。



- 1 田向城跡 2 大台城跡 3 山中城跡 4 牛瓶八幡神社
5 谷合 6 牛尾城跡 7 山室城跡 8 向田城跡 9 小堤城跡
10 施設島宮 11 坂田城跡 12 長倉城跡 13 鎌治屋台遺跡 14・15 八田砦跡
16 志摩城跡 17 大島城跡 18 大島砦跡 19 箱木要害台城跡 20 寒風城跡 21 箱木城跡 22 新城跡 23 飯倉城跡
24 小川台陣台寺 25 岩室砦跡 26 台宗籠寺 27 台砦跡 28 新井路傍板碑 29 生米城跡 30 宝米光明院 31 侍寺戸城跡
32 若梅城跡 33 虫生路傍板碑 34 田中砦跡 35 虫生広济寺 36 芝崎城跡 37 芝崎遺跡 38 中城跡 39 古城跡 40 芝崎西蓮寺
41 芝崎中島遺跡 42 虫生鬼堂遺跡 43 駒形城跡 44 小田部砦跡 45 永享寺 46 白銀不動院 47 五郎四社神社 48 木戸陣屋跡

横芝光町と周辺市町の中・近世遺跡分布

1. 篠本城跡

篠本城跡は町北部の篠本地区にあって、平成5年から10年に渡って発掘調査され、ほぼその全体を発掘して全容が明らかとなった。従って今は全く残されていない。その全容は城山台地を中心として、東は南北に細長い神山谷台地、西は方形の新台台地、南は傍示戸川に突き出した八石田遺跡と、東西500m、南北700mの、複数の台地に及ぶ多郭構造と言っていい城跡である。台地の最高標高は36m、城山直下の低地の標高は10mで、比高差20m以上ある要害に城が築かれている。

城の中心の城山では、台地上及び斜面に堀が20条近く數えられ、城の防御性を高めるだけでなく、それぞれの区画(屋敷地)の堀や排水のために掘られている。特に防御性の高い堀には、V字の薙研堀に仕切を設けている。それぞれの堀には薙研堀のほか、堀底が幅広い箱薙研堀、屈曲の仕方、深さなど様々あり、また掘り替えなどもあって、一時期にではなく、長期にわたって掘られたと思われ



篠本城跡と栗山川、その向こうに志摩城跡



篠本城跡全体図

る。深さは1mに満たない堀から、最大4.5mあり、それに応じて幅も最大10mある。堀に関して東隣の神山谷の北部では、堀底に連続した仕切のあるいわゆる障子堀がある。それに対して西隣の新台では、明確な堀がないのが対称的である。篠本城跡の堀は、全て埋められた状態で検出され、土層断面を見ると人為的に埋められ、この城に城割り(破城)を行った事が分かり、その歴史的位置が推定される。

堀では堀と対にあるのが土壘であるが、この城跡ではほとんど残っておらず、城割りの際に土壘の上で堀を埋めてと思われる。

建物跡は堀で区画されたそれぞれに、ほぼ同じ規模の掘立柱建物跡があり、その柱間は一定してなく構造は複雑である。建物跡内には粘土貼土坑がある例が多く、その用途が推定される。また建物跡の周囲には地下式坑があり、これもその用途が様々考えられている。



篠本城跡中心部



篠本城跡中心部（城山）の地形図



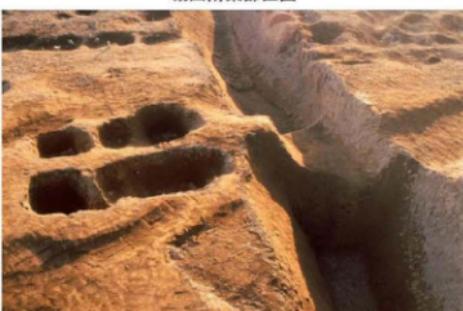
城山中央部（北から南を見る）



城山中心部建物跡群



城山南東部区画



中央部西側堀のくびれ部

右の写真は中心部建物跡の西側に当たる堀の土層断面で、右が西で、左が中心部になる。ここ土層を見て一目で分かる様に、下3分の1とその上とで、土の堆積状況が大きく異なる。右からは季節風による自然堆積であるのに対し、左からは一気に埋められた様に堆積している。この事実から、城割りが行われた可能性が高かった事を示している。



城山中央部西側堀土層断面



地下式坑



重なる粘土貼土坑

生活に関する遺構としては、地下式坑、粘土貼土坑、井戸等がある。地下式坑、粘土貼土坑は建物跡に付随してあり、井戸は斜面下の水脈のある所に設けられている。いずれも生活には必要な遺構で、その使い方で様々な論議が提起されている。



石鉢の出土状態

上の写真は石鉢が遺構に設置して出土した例で、近くには炉跡があり、石鉢も火を受けていた。その使い方が推定できる例である。

下の写真は、台地下の水脈の所に設けられた水場遺構で、台地側に井戸穴を掘り、斜面側に水溜、また山側に排水溝を配置している。井戸からは多くの石塔類が出土した。



斜面下の井戸跡や水場遺構



城山北西部の墓域と墓道



常滑壺を骨臓器にした火葬墓
上に載る蓋は五輪塔風輪



南東部斜面曲輪の土葬屋敷墓

篠本城跡からは、中世当時の墓が様々な形で検出された。ひとつは屋敷墓で、大抵の屋敷地の隅から一基は検出され、多くはお骨が残っていたが、被葬者は老若様々で、中には下写真の様に幼児墓もあった。

明確な墓域は2箇所検出し、その土葬墓は全く骨は残らず、火葬墓で焼骨があったのみである。そのうち2基は骨臓器に入り、1基は火葬坑で、火葬後にそのまま埋葬された骨が出土した。

新台からは二連型の火葬坑が検出され、遺跡内でも比較的新しい時期に属す。

東の神山谷遺跡では、細尾根状の所に、径10mほどの円形に掘り窪めた墓地があり、ここでも人骨の残存は皆無であった。しかし、南端の単独墓(屋敷墓)では、女性骨と思われる全身骨が検出された。



中央部堀横腹に掘られた土葬墓
坑の小ささとお骨から幼兒である。



中国龍泉窯系青磁



中国定窯系・景德鎮窯白磁



古瀬戸窯瓶類



古瀬戸窯小皿・碗類



古瀬戸窯大皿・鉢類

篠本城跡出土の貿易陶磁では中国製の青磁、白磁のほか、褐釉壺、天目碗等がある。青磁は龍泉窯系の鎬蓮弁文碗、九碗、稜花皿、盤などがあり、13～15世紀の南宋から明代のものに当たる。中でも端反碗や盤は、器胎や釉色が良く、いわゆる砧手と呼ばれるものである。

白磁では口禿皿、割高台皿、端反皿、八角杯、九杯等があり、器胎からクリーム色で陶質の定窯系と白色の景德鎮窯系に分けられる。青磁と同じ様に13～15世紀代のもので、どちらかと言うと新しいものが多い。

天目碗は器胎が黒く、釉に照りがあり、建窯のものと思われる。褐釉壺は器胎が肌色で白粒子を含み、中国南部のものと思われる。



天目碗と褐釉壺片

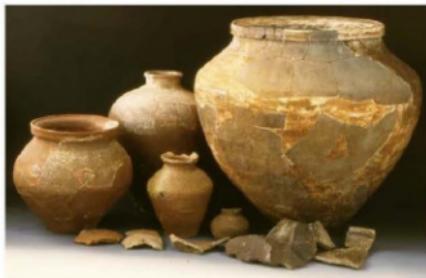
古瀬戸は、前期様式と思われるものはほどないが、強いて取り上げると瓶子と四耳壺がある。中期になって、瓶子、平碗、大皿香炉等、少し増えてくる。後期になると爆発的に増え、小は縁釉小皿から、大は大皿・茶壺など、ほとんどの器種がある。中でも縁釉小皿は小片も含めて200点、平碗は85点、大皿は65点にも及び、生活食器が増えてくる。そのほか香炉、花瓶などの宗教的なもの、茶壺、抹茶入、天目碗等、嗜好的なものまであり、生活に豊かさも見えてくる。

古瀬戸後期段階になると、これを真似た庶窯も生まれ、篠本城跡でも擂鉢、茶入などが、駿河の志戸呂窯製品とされる。

瀬戸大窯段階になると急速に減少し、1期の小皿、擂鉢、2期では小皿がわずかにあるのみとなる。



茶道具三宝



常滑窯・壺



常滑片口鉢



渥美窯・壺

古瀬戸のほか、国産陶器では常滑、渥美製品、在地土器、瓦器等が篠本城跡から出土している。常滑では3型式(12世紀)の片口鉢から10型式(15世紀)の壺・鉢まであり、5型式から9型式までは数量的に一定するが、10型式で堺が急増する。特筆するのは6型式の玉縁壺と片口鉢は藏骨器に、また同期窯口壺は鉄漿(おはぐろ)壺に使われていた。

渥美では壺と甕があり、これは12~13世紀に限られ、数は13点で、いずれも破片である。

土器小皿は、全て輪轤整形で体部が朝顔形に開く形で、14世紀後半から15世紀前半のものが多い。また、底部に孔をあけた可杯(べくはい)が2点あり、土器小皿130点がこの城跡で多い少ないは別として、また面白い趣向の酒宴があつた事を想起させる。

内耳土鍋は鉄鍋を模した物で、内側に紐掛けの耳が付いている所から呼ばれる。紐で吊るして囲炉裏に掛けて使う。浅鉢形と深鉢形に大きく分けられるが、篠本城跡では浅鉢形がほとんどで、深鉢形は1点のみであった。細かい形態では、内側に段を有する物と無い物とがあり、色ではほとんどが茶褐色で酸化炎焼成であるが、中には灰色の還元炎焼成や黒色の燐焼成の物がある。

茶釜形土器もやはり鉄製茶釜を模した物であるが、こちらは外側に紐掛けが付く。このほか土製の擂鉢もある。



土器小皿（かわらけ）



内耳土鍋



茶釜形土器



金属製品（蝶番金具、目貫、八幡座金具
笄、結紐留、銅金具
八双金具、切羽、大切羽）



錢貨

篠本城跡出土の金属製品のうち、形が明確に分かれる物の多くは銅製品で、その主な物は武具類になり、上の写真では目貫、八幡座金具、鎧紐留、銅金具、笄、八双金具、切羽、大切羽等がある。このほか蓮花彫金具銅蝶番金具、銅皿、それに下写真のような和鏡が出土している。和鏡は古い物では平安時代の菊花双雀鏡から、南北朝期の尾花双雀鏡まで、また、懐中経と思われる小型鏡も數点出土している。



城山出土の和鏡



新台出土の和鏡

鉄製品では、小柄が1点あったほかは刀物類は無く、最も多い物としては燧金と思われる鉄片が20点ほど出土した。それに伴う物として砥石があり、これは主に瑪瑙製が20点ほどある。石製品の小物としては砥石があり、これには中砥としての沼田砥石が多く、形は両端尖薄形、変形賽子形、羊羹形、有孔等様々で、使い方(研ぐ対象)によってその形が変化したのであろう。また、仕上砥用の高級な鳴滝砥石も数点あり、これは刀研ぎ用と思われる。



燧鉄と燧石



砥石

大形の石製品では、茶臼、石鉢のほか、石塔類がある。茶臼では筒形の上白と挽粉受のある下白どちらなり、石材は銚子石の砂岩製と伊豆石の安山岩製がある。全て破損あるいは破片であるため、何組あったかは不明であるが、最低5組はあったと思われ、他の茶道具と合わせ、結構茶の湯を嗜しんでいた事が想像される。石鉢は全て砂岩製で、多くは火を受けた跡があり、加熱して使っていた事が考えられる。

石塔類では板碑、五輪塔、宝篋印塔がある。板碑では緑泥片岩製の武藏型が1点と破片があり、飯岡石製の自然石板碑が6点、砂岩製の無刻板碑が3点あり、いずれも小型である。五輪塔は全て砂岩製で、空風輪、火輪、水輪、地輪の4部分からなり、全てバラバラで出土したため、組み合わせは不明で、欠損の少ない物だけで120点近くあり、30組にはなろう。宝篋印塔は層輪、笠、塔身、基礎どちらなり、15点ある。また一石宝篋印塔が2点出土した。



茶臼



石鉢



板碑



堀から出土した石塔



五輪塔



宝篋印塔

2. 芝崎遺跡

芝崎遺跡は栗山川左岸の沖積低地の、標高2~4mの砂州上の微高地に立地し、北の背後には台地が迫り、南西に栗山川が流れる。この微高地には奈良時代から集落が営まれ、平安時代中期には一旦終息するが、鎌倉時代になるとまたわずかではあるが、生活の痕跡が残される。また、千葉と続子との街道筋にもなり、栗山川を使った水運の交差点ともなり、また栗山川を渡る宿駅としても利用されたであろう。16世紀になると坂田城と芝崎城との連絡地となり、宇水神からは当該機の堀が検出され、ここに居館が構えられた可能性が考えられる。

平成12年から16年にかけて発掘調査され、検出された遺構は、栗山川に近い西部で、鎌倉時代の建物跡と溝が検出され、ここからは青磁蓮弁文碗と山茶碗が出土した。中央部では街道筋について建物跡と土坑、排水溝などが検出され、14世紀の常滑、瀬戸などが出土した。頭部の高所では15世紀の建物跡と粘土貼土坑が検出され、瀬戸平碗などが出土した。またその東側の斜面には、細跡も検出され、農村が形成されていた。東部の栗山川岸の宇水神では、仕切りのある浅い障子堀が検出され、カワラケが出土した。また近くから中国製染付皿が出土し、ここが16世紀の坂田城と芝崎城を結びつける所であったと思われる。



西部で検出した
13世紀代の溝

中央部で検出した
15~16世紀代の道

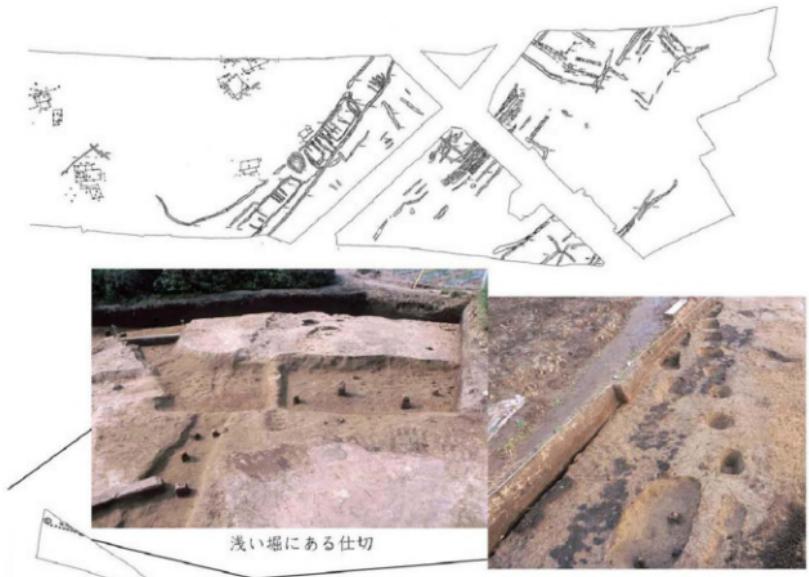


西部で検出した13世紀代の建物跡

芝崎遺跡中世遺構



芝崎遺跡中央部



浅い堀にある仕切

上部が無くなった障子堀
(黒いのは道跡に堆積した富士宝永火山灰)



芝崎遺跡出土の貿易陶磁（表・裏）



芝崎遺跡出土の古瀬戸碗・皿



芝崎遺跡出土の大皿・瓶



芝崎遺跡から出土した中世陶磁器では、貿易陶磁で中国龍泉窯系高麗青白磁が多く、他に白磁壺、青白磁梅瓶、染付皿・碗など、12・13世紀代と16世紀代がある。

古瀬戸では中期の瓶子と後期の碗・皿、大窯の丸皿がある。

常滑では13世紀代の山茶碗があり、片口鉢でも同期5型式がある。

芝崎遺跡出土の
常滑山茶碗・捏鉢

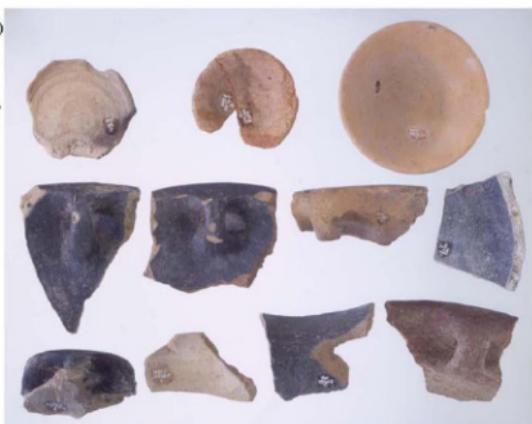


片口鉢には常滑と古瀬戸
とがあり、古瀬戸の方が色
が薄く少し軟質である。常
滑の片口鉢は6~8型式が
ある。壺・甕類では、渥美
が1点あり、常滑では5~
9型式があり、全体的に鎌
倉~戦国期まで、数は少
ないがまんべんなくある。

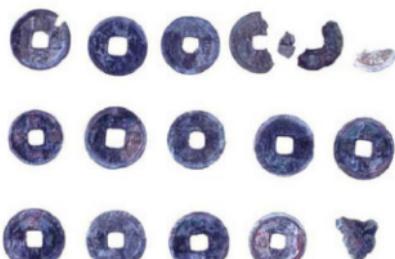
芝崎遺跡出土の常滑・
渥美製品の壺・甕

土器類では、小皿(かわらけ)
は縁が少し立つ13世紀代と朝
顔形の16世紀代がある。

内耳土鍋と茶釜形土器があり、
黒色の焼成で焼いているもの
があり、周辺遺跡のものと変わ
らない。



芝崎遺跡出土の
中世土器



錢貨は開元通寶、至道元寶、祥符元寶、
天聖元寶、皇宋通寶、熙寧元寶、永樂通
寶がある。

芝崎遺跡出土の中世錢貨



中島遺跡中世居館の発掘

中島遺跡の居館跡には、主郭と副郭の二つの曲輪からなり、主郭は一辺 60m ほどで、東側は二重堀があり、西側は一重堀で、その外側にも建物があった。主郭には数等の大形建物が建っていたと思われ、建物の北側には不定形に周回する溝が二条あり、もしかすると庭園の様であったか。居館の南側の堀の外には、水田跡が検出され、下の写真は水田の基底面で、凹みは足跡であろう。その断面を見ると、基底面の堺が波状を打ち、地山は砂地で最上に鉄が凝着し、その上に黒色の中世水田土壌が堆積する。



中島遺跡の火葬坑



中島遺跡の井戸跡の調査



中島遺跡の中世水田跡基底面



水田跡の断面



中島遺跡出土の貿易陶磁

中島遺跡の貿易陶磁は、龍泉窯系鍋蓮弁文碗が多く、他に基筒底皿がある。白磁は定窯系の蓋があるのである。

古瀬戸では、前期の四耳壺はじめ、中期の水注、後期の縁釉皿、平碗、天目碗、茶壺等様々になる。

常滑では6～9型式の片口鉢、壺、大壺などがあり、土器類では13世紀代の小皿があり、内耳土鍋は浅鉢形が20点以上出土している。

中島遺跡では地下水位が高い所から、木製品が多く出土したが、中世では漆器片3点と刀・羽子板形代、折敷、井戸棒等であった。

土製品では、土錘と思われる円筒形のものが28点出土した。



中島遺跡出土の古瀬戸製品



中島遺跡出土の常滑製品



中島遺跡出土の漆器



中島遺跡出土の土錘



中島遺跡出土の木製品

4. 傍示戸遺跡・傍示戸城跡

傍示戸遺跡は栗山川左岸の標高37mの台地上にあり、その台地の南西先端の栗山川を望むところに、傍示戸城と呼ばれた城が築かれた。南縁に城跡の痕跡である土塁が残されるのみであったが、平成16年の発掘調査によって、堀、建物跡が検出され、篠本城跡のような多郭村落型の城跡であることが分かった。城の存続時期は出土遺物から15世紀代で、短期間であった。

出土遺物は、貿易陶磁の白磁皿、古瀬戸小皿・平碗・香炉等、常滑大甕、内耳土鍋、茶釜形土器、土器小皿、錢貨、切羽、硯、磁石、石鉢、五輪塔などがあり、おおむね15世紀代のものである。

傍示戸城跡は、文献には全く登場せず、誰がいつ築城したか分からないが、谷を隔てた南側に、芝崎虫生城郭群があり、それとの関連が考えられる。



傍示戸遺跡・傍示戸城跡



南西部区画（左側に「土塁」）



北部区画



南東部区画



傍示戸城跡から出土した古瀬戸縁釉小皿と
白磁割高台皿・八角杯

5. 坂田城跡

坂田城跡は、県内でも有数の戦国時代の城跡で、はじめは千葉氏が築いたと言われ、次いで15世紀には千葉氏庶流の三谷氏があり、弘治元(1555)年、山室氏の客将であった井田友胤によって奪われ、その子胤徳によって戦国時代城郭として大幅に改修され、今日遺されているようなような姿となった。井田氏は千葉氏の家臣としてこの地の領国経営に当たり、永禄年間には里見氏配下の正木氏が東経乱入し、この時、坂田城も防戦したと言われる。天正十八(1590)年、豊臣秀吉の小田原攻めでは、北条氏に属したため、坂田城は開城し、破却となった。

城主の井田胤徳は浪人した後、徳川家康の5男武田信吉に仕官、水戸に移り、信吉死後水戸に入った徳川頼房に再仕官し、水戸藩士として幕末、今日まで続く。坂田城跡は、標高30～35m、台地上幅約100m、長さ500mの台地を輪切りする様に堀で区切った、典型的な直線連郭式の城郭で、二重堀切、横矢掛など戦国期特有の設備を有している。しかし、現認では堀には堀底仕切は確認できない。先端の左郭が主郭で無城と呼ばれ、北側に土塁を背負い、そこに御主殿が建っていたと思われる。右側が見台で馬出し曲輪の機能を有していたろう。次の北側の曲輪は登城と呼ばれ、二の丸的な区画であろう。



坂田城跡空中写真（南西側から）

戦国期の坂田城主である井田氏は、その出自が分からず、また、系団に似ついても不明な点が多い。左の系団の右は千葉県の歴史その他から類推して引いたもので、初代の胤光は天文元(1532)年美濃守刑部大輔とされるが、永正二(1505)年に刑部大輔として現れ、これが特定できない。あるいは2代目かもしれない。また、2代目の胤俊も美濃守刑部大輔、その子の友胤が因幡守刑部大輔、またその子が因幡守胤徳となり、これが豊臣秀吉の小田原攻めの時、小田原在番している。左の系団は伊藤一男氏による推定で、胤俊は出す、代わりに氏胤が出ている。このほか断片的に残る文書等でもそれぞれ異なる系団が記され、なお問題を複雑にしている。井田氏に関する文書のうち、山室譜伝記の様に江戸時代に伝承をもとに書かれたものが多く、日記、軍忠状のような一次資料的なものはない為であろう。何れにしてもこれらのことから、井田氏は鎌倉以来の地縁農民的武士ではなく職業的武士として、北条氏あるいは千葉氏に仕官し、山室氏の客将としてこの地に入り、勢力を得た。しかし、主家の北条氏が落ちぶれた後、地縁のないこの地を捨て、次の仕官先を求めて、他国へ移って行ったのである。



井田氏系図2例



板碑



大手口



二の門



姫塚



御主殿口



坂田城跡の構造

6. 鍛冶屋台遺跡

鍛冶屋大遺跡は、坂田城跡の谷を隔てた西側の標高30mの台地にあり、中世遺構は台地上と南側斜面にあるテラスとから検出された。中世遺構は掘立柱建物跡26軒、粘土貼土坑13基、土坑などがあり遺物は茶臼、古瀬戸、錢貨等わずかであった。遺物から15世紀代と思われ、坂田城盛期よりは1世紀ほど古くなり、長倉城と同じ三谷氏在城時代と考える。



鍛冶屋台遺跡遠景(後方右が坂田城跡)



鍛冶屋台遺跡空中写真)



南側斜面テラスの遺構



茶臼が出土した土坑



出土した茶臼下臼

V. 横芝光町の近世(江戸時代)

1. 神山谷遺跡

神山谷遺跡西側斜面に、元々中世段階に段整地した所に、江戸時代になって、また庶民が住んだのである。遺構は建物跡の他、井戸、窯跡等があり、水溜あるいは廁の桶も検出された。遺物は江戸前期から後期までの陶磁器、漆器碗、下駄等があり、中でも注目されるのは、瀬戸の小杯がおおくあり、今のお猪口で、ここに飲み屋があった事が推定される。



神山谷遺跡近世遺構



江戸前期の陶磁器



江戸中期の陶磁器



江戸後期の陶磁器



塙擂鉢
漆器碗

2. 長倉経塚

長倉の大宮神社後の山林の中に、今も塚が1基ある。その東側にかつてもう1基あり、昭和59年発掘調査され、右写真のような和鏡と鉦鼓、銭貨が出土した。



発掘調査中の長倉経塚



経塚から出土した遺宝

おわりに

横芝光町は、千葉県の中でも比較的多くの中世遺跡(城郭)が所在し、これまでに発掘された遺跡にも、大小の差はあっても中世遺構が必ずと言っていいほど検出された。また、今日の町並や景観の中にも、中世以来と思われる面影が見られ、その歴史的な影響が残されている事が感じられる。また、横芝光町には「鬼来迎」と言う、中世から継承されている民俗芸能もあり、「中世」という言葉が、この町のキーワードを取り上げる事ができる。

今回紹介した資料は発掘した遺跡だけで、まだまだ町内には多くの遺跡が様々な形で残され、町の景観のひとつとなっている。「鬼来迎」に関わる芝崎・虫生城郭群、戦国時代の坂田城跡など、これらを町の歴史文化の基本にえ、町の顔として今後に活用し、町の発展に貢献できれば幸いである。

「考古資料で見る横芝光町の歴史展」は、今回で4回目となり、近世江戸時代まで来て終りとなる。町民ギャラリーで4回にわたって考古資料を展示し、それから町の歴史を考えてみたが、この小さな町でこれだけ豊富に考古資料があるのは、千葉県内でもそう多くはないと思われる。それだけにこれら考古資料を、常に多くの人々にご覧頂く事ができないのは残念である。これからも企画を変えて、多くの貴重な資料を、多くの皆様に紹介して行きたいと思います。

参考文献

- 村山好文他 (1985) 長倉宮駒 横芝光町教育委員会
伊藤一男 (1986) 横芝町文化財研究紀要Ⅱ 粉豆遺跡学術調査中間報告 横芝町教育委員会
新井和之 (1989) 千葉県匝瑳郡光町八石田遺跡発掘調査報告 光町八石田遺跡調査会
滝川恒昭他 (1995) 千葉県所在中世城跡群詳細分布調査報告書Ⅰ 千葉県教育委員会
伊藤一男 (1996) 坂田城跡統合調査報告書 上総井田文書 横芝町教育委員会
笠生 衛他 (1998) 千葉県の歴史 資料編 中世1 財団法人千葉県史料研究財団
道澤 明 (2000) 篠本城跡・城山遺跡 財団法人東総文化財センター
岸本雅人、宮内勝巳、本多昭宏 (2002) 神山谷遺跡(1) 財団法人東総文化財センター
本多昭宏 (2002) 神山谷遺跡(2) 財団法人東総文化財センター
本多昭宏、宮内勝巳 (2002) 新台遺跡 財団法人東総文化財センター
道澤 明 (2005) 芝崎遺跡Ⅰ 財団法人東総文化財センター
道澤 明他 (2006) 芝崎遺跡群 財団法人東総文化財センター
宮内勝巳 (2006) 傍示戸遺跡 財団法人逃走文化財センター
島立桂他 (2007) 長倉鍛冶屋台遺跡 財団法人山武郡市文化財センター
福田豈彦他 (2007) 千葉県の歴史 通史編 中世 財団法人千葉県史料研究財団

平成27年度企画展

考古資料で見る横芝光町の歴史 4 —中・近世—

発行日 平成27年10月10日
編集・発行 横芝光町教育委員会
印刷 三陽メディア株式会社

